HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	特別号・グローバルCOE「境界研究の拠点形成」によせて
Author(s)	岩下, 明裕
Citation	境界研究, 1, iii-iv
Issue Date	2014-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.s.0
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61346
Type	departmental bulletin paper
File Information	00forewar.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

特別号・グローバルCOE
「境界研究の拠点形成」によせて

2009年から活動してきた北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」の事業もこの3月で終了を迎えることになりました。英文雑誌*Eurasia Border Review*の刊行、若手研究者を軸としたサマースクールの実施、成果発信の場としての博物館展示の活用、さらには展示やフィールドワークなどを軸にしたドキュメンタリーDVDの制作など、様々な斬新なアプローチにより、これまで日本では学問として成立していなかったボーダースタディーズの意義や成果をアカデミアや実務の方々にも十分に共有していただけたように思います。境界地域研究ネットワークJAPAN(JIBSN)の設立により、対馬、与那国、根室など境界（国境）自治体と研究機関の連携が始まり、若手研究者が自治体で実務経験を積み、実務者が大学で報告をするといった双方向の連携が行われるようになりました。中京大学を始めいくつかの大学では境界研究がプログラムとして立ち上がり、様々な人文・社会系の学会でもボーダースタディーズに関連したパネルやセッションが恒常的に組織されるようになりました。

また目標として掲げていた、ボーダースタディーズのコミュニティでは長年、空白になっていたユーラシア及び東アジアのエリアを、その豊富な地域研究の成果の成果で埋め、これを世界と接合するという試みも、BRIT（Border Regions in Transition）第12回世界大会の誘致やABS（Association for Borderlands Studies）での活動を通じて達成されました。内外の多くの若手研究者が私たちの拠点に集い、またそこから旅立つかたちで、ネットワークは拡大し、そのなかで「ジャパン・スクール」とでもいえる私たちの存在は確固たるものとなりつつあります。いわば、ボーダースタディーズという学問領域を開拓・定着させ、それをアカデミアだけでなく実務者とつなぐという本事業は、若手研究者の新たなキャリアパスを創出するということでも新たな貢献がなしえたように思います。

今回、事業終了を記念し、『境界研究』では事業推進員や本拠点で活躍した若手研究者の論考をまとめることで特別号を刊行する運びとなりました。特別号は、通常の号と異なる編集方針をとり、完成されたボーダースタディーズの作品と言うよりは、むしろその成果に至るまでのプロセスを共有できるような論考、

いわば舞台裏がみえるような作品群を集めました。読者の方々は「生煮え」のような印象をもたれる方が少なくないかもしれませんが、この「生煮え」こそが、ボーダースタディーズの現状であるとともに今後にむけた大きな潜在性だと私は考えています。

あえて手を加えない「素材」を集めるかたちで、今回、特別号を編むに至ったのは、ボーダースタディーズのディシプリンとしての多様性（いわば途上性）に鑑み、むしろ境界をどうとらえていくかの思考と試行プロセスが重要であること、完成品よりもむしろその作品ができあがっていく臨場感とライブ感にこの学問のだいご味があること、そして現場主義や身体性についての視座がその原点にあることを、読者の方々と共有したいと思ったからです。

一見、ばらばらにみえる作品群ですが、そのなかには、境界をこえる諸事象を複合的に分析しようとするオーソドックスなものから、一つの空間を境界地域として多様に読み解く挑戦的なもの、境界概念を操作し事象への分析枠組として活用するもの、境界事象を現場とのかかわりで再構成する実践的試みなど、様々なアプローチを見出すことができます。これら様々なアプローチや研究の成果をどのようにボーダースタディーズとして体系化するのかは私たちに残された課題ですが、実態研究と表象研究をどのように結び付け、地域を越えた比較を可能とする理論的整備への志向は、世界のコミュニティでも共有されており、本号はボーダースタディーズの統合へ向けたひとつのステップであると位置づけることができます。

『境界研究』は、次号から、北海道大学スラブ研究センターの境界研究ユニット（UBRJ: Eurasia Border Research Unit, Japan）が中心となって刊行していくことになります。上記の課題もそのなかで一つ一つ乗り越えるとともに、「ジャパン・スクール」として、事例研究としてもまた理論研究としても、世界に貢献できるオリジナルな研究成果を発信していきたいと考えています。

2014年2月

グローバルCOEプログラム拠点リーダー
『境界研究』編集代表者　　岩下明裕